



- 永代共養墓について
- ぶつぶつ雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院News
- メールを送る
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小坊主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつムクイズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれしび
- ふしぎな密教法具
- 地図・アクセス
- サイトマップ

 検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を「2」](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を「1」](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高！](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかかる\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかかる\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の回窓会](#)
- 第16回 [不老不死のお酒](#)
- 第15回 [アンチエイジング](#)
- 第14回 [女子力不足](#)
- 第13回 [仏のレッスン](#)
- 第12回 [母と子をつなぐ道](#)
- 第11回 [座敷わらし](#)
- 第10回 [夢のお告げ](#)
- 第9回 [犬に引かれて](#)
- 第8回 [生まれ変わり](#)
- 第7回 [お葬式の意味](#)
- 第6回 [不思議なご縁](#)
- 第5回 [生きるための勇気](#)
- 第4回 [祖母の形見](#)

仏教一年生

山田真美・著



作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

[プロフィール紹介](#)

第12回 母と子をつなぐ道

BI 0 チェック いいね! 0 Tweet

先日、高野山町石道(こうやさんちょういしみち)と呼ばれる全長23.5キロの道のりを、娘とふたりで歩いてきました。この道は、高野山真言宗の総本山である金剛峯寺と、九度山町の慈尊院とを結ぶ古道で、ユネスコの世界遺産にも登録されています。

かつて高野山の政所(税金を徴収したり外部との交渉に当たった事務所)であった慈尊院は、弘法大師空海の母君である玉依御前(たまよりごぜん)が晩年を過ごされたお寺でもあります。

玉依御前は、息子・空海が開いた高野山を「一目でいいから、この目で見たい」と強く願い、長年暮らした四国を離れて、はるばる高野山までおいでになったといわれます。このとき、玉依御前はすでに80代半ば。ご高齢を押して四国をあとにしたからには、「高野山に骨を埋めよう」という、文字どおり命を賭けた覚悟があつてのことでしょう。

空海ご自身も、どんなにか母君を高野山へ迎えたかったことでしょうか、当時の高野山は女人禁制。たとえ宗祖の母といえども、その聖域に足を踏み入れることは許されていませんでした。

伝説によれば、玉依御前が高野山へ近づくにしたがつて、恐ろしいほどの雷鳴が轟きわたり、火の雨が狂ったように降り注いだといわれます。万事休すとなりかけたところへ、空海が駆けつけ、「えいっ」とばかり近くにあった大きな岩を押し上げて、その下に母君を匿(かくま)われたとか。それが、今も路傍に残る「押上石」です。

そのあと空海は、母を慈尊院に住ませ、ご自分は今までどおり高野山に住んで、そこから足繁く母のもとへ通われたといえます。その回数が月に九度ほどだったことから、慈尊院の一带は九度山(くどやま)と呼ばれています。

さて、話は変わります。

今から数年前のことになりますが、私はひょんなことから真言密教の思想に関心を抱き、弘法大師について知りたいと強く思うようになりました。どうせなら空海をきちんと継承している教育機関で学びたいと思い、高野山大学の大学院に入れていただいたのが2年半前。そのあとは仕事や家事の時間をやりくりしながら勉強を続け、おかげさ

- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



まで、このたび修士課程を修了することができました。

学位記授与式（いわゆる卒業式）へは、これまで一度も高野山を訪ねたことのない娘を連れて行くことにしました。娘は早稲田大学でコンピュータ関係の研究をしている大学院生ですが、幸い春休みで自由時間があつたのです。せっかくですから、空海が母君を訪ねて通ったという道を、私も娘と一緒に歩いてみることにしました。

高野山町石道の歩き方としては、慈尊院をスタートして金剛峯寺をめざするのが普通です。ところが今回は学位記授与式に出席するため、まずは高野山に行かねばなりません。そこで普通とは逆ルートで、金剛峯寺をスタートし、慈尊院をめざすことにしました。3月半ばとはいえ、標高900メートルの高野山は肌寒く、ところどころに純白の雪が残っています。町石道に一步踏み入ると、まるでそこだけ時間が止まっているような、異次元にも似た一種独特の気配が広がっていました。

路傍には、町石（ちょういし）と呼ばれる高さ3メートルほどの石の卒塔婆が、1町（約109メートル）ごとに全部で180基も建てられています。これらの道標を最初に建てたのは、空海ご自身で、オリジナルの卒塔婆は石ではなく木製だったようです。

卒塔婆が巡礼者にとっていかに大切なものであるかは、歩き始めてすぐにわかりました。23.5キロの山道を歩くことは、口で言うほど簡単ではありません。ところが、これらの卒塔婆には「一町」から「百八十町」までの通し番号が刻まれているため、自分がどれだけ歩いたかが手に取るようにわかるのです。

「三十八町の卒塔婆の近くに展望台があるらしいから、そこまで行ったら一休みしよう」「やっと九十町まで来た。あと半分だ。がんばろう」

といった具合に、卒塔婆に勇気づけられながら、長い道のりを頑張れる感じなのです。ちなみに、通し番号は金剛峯寺が「一」で慈尊院が「百八十」となっていますから、本来、この道の出発点は金剛峯寺だったのではないのでしょうか。一刻も早く母に逢うために道を急いだ、その気持ちを想像すれば、空海が常住した高野山がスタート地点で、母が住んだ慈尊院がゴールと考えるほうが、むしろ自然ではないのでしょうか。

それにしても、トレッキングシューズもなかったあの時代に、山道を月に9度も往復するご苦労は如何ばかりであったか。いくら空海が並みはずれたパワーの持ち主であったとはいえ、その行動にはほとんど鬼気迫ものを感じます。なにしろ私など、今回のたった一度の片道の山歩きで、両足の親指の爪を剥（は）いでしまいました。それぐらい厳しい道のりなのです。

さらに驚くべきは、85歳になる玉依御膳が、高野山を見たい一心でこの険しい山道を登ったということです。この悪路を、年老いた母はどうやって登られたのか。道のところどころには岩が剥き出しになっており、つるつると足もとが滑って、駕籠（かご）や馬が通れたとはとても思えないのです。

「それは伝説だから」と言ってしまうと、それまでの話ですが、しかし今回、高野山町石道を自分の足で歩いてみて、私は空海ご自身の偉大さもさることながら、ほとんど捨て身で遮二無二（しゃにむに）息子に会いに行つた、母君のひたむきな人間らしさに、魂の底から湧きおこってくるような感動を覚えずにはいられませんでした。

そしてまた、こうも思いました。

（高野山を誰よりもその目で見たかつてあろう玉依御前は、ついに高野山をご覧になることなくこの世を去り、それから1,200年近くが経つた今、私はその道を娘とふたりで仲良く歩いている。なんとありがたいことか—）と。

高野山に登ることも、大学院に入るとことん学問を極めることも、今はすべて自由。女性だからと制限されることは一つありません。本当に、よい時代に生まれたなと思います。

しかし、空海という空前絶後の天才を産み育てた張本人でありながら、ついに息子が開いたお寺を見ることすら許されなかった玉依御前のような女性があったことを、私たちは決して忘れてはならないでしょう。

すべての偉業の後ろには、偉大なる母の存在と、無償の愛がある。そんなあたりまえのことを改めて噛みしめた、母と子をつなぐ23.5キロの道のりでした。

≪ [第11回 座敷わらし](#) [第13回 仏のレッスン](#) ≫

山田 真美（やまだ・まみ） プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士（高野山大学）。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。

1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学(豪)でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェロースhipを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。



山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>

お近くで樹木葬をお探しなら

樹木葬18万円、永代供養墓10万円～。 eitaikuyou.netへ進む



[▲このページの先頭へ](#)



[永代供養墓 密厳霊塔](#)

[しいなまち みとら](#)

[こんごういんキッズ](#)

[メディアで紹介](#)

[ぶつぶつ雑記ブログ](#)

[唱えてみよう!](#)

[たいけんしてみよう!](#)

[東京お寺めぐり](#)

[ばばのレシピ](#)

[真言宗について](#)

[仏教いちねんせい](#)

[まんが 小坊主くん!](#)

[ぶつ仏クイズ](#)

[ふしぎな密教法具](#)

[金剛院イベント情報](#)

[金剛院NewS](#)

[金剛院について](#)

[金剛院の四季](#)

[地図・アクセス](#)

[メールを送る](#)

[おすすめリンク集](#)

[バックナンバー](#)

[サイトマップ](#)

お近くで樹木葬をお探しなら

樹木葬18万円、永代供養墓10万円～。 eitaikuyou.netへ進む

